

『深夜0時のヒーロー論』

作者 浅羽一

誰かを傷つけるくらいなら、代わりに自分が傷ついた方が良い。ただ、僕はどれだけ深く傷ついても変わらず笑っていられるほどには強くないから。そして僕は、傷つけるのも傷つけられるのも無くす為、いつそ誰とも関わらずに生きていこうと決めた。それはつまり、自分の力で生きると同時にあらゆる孤独を受け入れよう。

だけど、その選択は往々にしてこんな風に言われてしまう。弱い、狡い、卑怯、格好悪い、或いはもつと残酷な単語で。けれど何よりも残酷な事は、その選択そのものが時に誰かを傷つけてしまうという事だ。

今でも思い出すのは高校時代、体育祭の準備で盛り上がる教室で女生徒の一人に言われた言葉だ。

「みんなが本気でやろうとしてんの、何でそうやって逃げんの」

クラス対抗のリレーに出場する選手を決めようとしていたH^{ホムカールム}Rでの一幕だ。

合計で五人を選ばなければならぬ中、しばらくの話し合いの末に単純であるが勝つ為にはやる気の有る無しよりもスポーツテストの成績順に選手を決めるべきだという話になり、幸か不幸か僕がその内の一人として推薦された。

僕としては驚きだったのだが、他の四人はむしろやる気にこそ満ちていた。するとそれに感化されたのか、クラス中が「いつちよやったろうぜ」なんて盛り上がりを見せ始めた。だからこそ、僕の「出来れば止めたいんだけど」は全員の視線と同時に非難を集めた。

一体どうして、と皆が怪訝そうな顔をした。「何で嫌なの」と何人かがはつきりと聞いてきた。僕はそれに「出たくないから」と答えた。直後、やや離れた席に座っていた女生徒が先の台詞を口にしたのだ、あろう事かその瞳にうつつすらと涙さえにじませて。

ああ、僕はまた、誰かを傷つけてしまったんだと、立ち上がった彼女を見つめながら無言で思っていた。「出来る力があるのにやろうとしないのは、本当に格好悪いよ。負けるかも知れないなんて気にする前に、勝つ為に戦えば良いでしょ」。彼女の糾弾は止まらず、他の面々も彼女を止めようとしなかった。どうやら彼らは僕が敗北を恐れて一人逃げをしようとしていると考えたらしかった。

なるほど、ある意味それは間違いだとはばかり言い切れないのかも知れない。何故なら確かに僕は一人だけ彼らとは別の場所に立ってしようとしていたのだから。勝つとか負けるとか、そんな結末に関係なく、いやそれ以前にそもそも体育祭どころか「クラス一丸となって何かの行事に参加する」みたいな風潮そのものに対して関わろうとしていなかった。ただどそんな考え方が要するに彼女に言わせれば「逃げている」らしかった。

結局、僕は悔しそうに自分を睨んでくる彼女に「ごめん」と告げ、せめてもの償いとしてリレーのアンカーを勤めた。当日も全力で走った。結果、成績としては全七クラス中三位というものだったが、彼女たちは皆さながら優勝でもしたかのごとく一様に満足そうに笑っていた。僕はその光景を輪から数歩ほど離れた場所で眺めていた。喜んでくれたのなら良かったと思う反面、僕はきつと自分の考え方が一般的に受け入れられる未来は訪れないのだろうかと思わなくなった。

人間が嫌いなわけじゃない。ましてや誰か憎らしい相手がいるなんて事もない。むしろみんなが笑顔でいられれば何よりだと思ふ。その為に誰か一人が泣かなければならないのなら、或いはそれが自分であったとしても構わないとさえ思ふ。でも、だからって好んで泣きたいわけじゃないし、出来る事なら自分だっていつでも笑って生きていたい。だけど、

おそらくはこれこそが最も難儀な話なのだけれど、他の誰でもなく僕自身がそんな風ばかり生きていけるなんて信じていないのだ。

「誰かを傷つきたくないとかって言うけどさ、それって結局は自分が傷つきたくないだけなんでしょ」

そしていつも自分から動こうとしない僕はしばしばそんな言葉でもって責められる。例えば恋愛に於いてもそうだし、高校時代みたいなイベント事に於いてもそうだし、他にも生きていく中で他人との関わりを求められる時は大体そうだ。

間違っただけではないのだろう。でも、それはきつとお互いにはずだ。

誰も傷つきたくないのだ。自分も傷つきたくないのだ。だからこそ距離を置くのだ。決して褒められる行為ではないだろう。英雄的な生き方とはまるで正反対で、かといって思わず惹かれるような危険な魅力もない。弱いと見られても仕方なく、またもつと端のにつまらない男なのかも知れない。

でも、諭えそうだとしても、僕は同時にちゃんと代償も払っている。それは孤独を受け入れる事だ。悲しいかな、それを後ろ向きに言い訳だと否定される事があつたとしても、それも強さの一つだと認められる事はほとんど無いけれど。

大人になり、自立して生きていけるようになり、同時に一人で生きていく難しさを知つた。だからこそ、独りで傷ついている人間の寂しさを知っている。

矛盾しているような話だが、目の前で泣いている人間がいれば声を掛けようと決めている、仮にそれで不審がられる事になつたとしても、少なくとも一度は。

普段は誰かと私的な関係を結ぶ事もなく、何処かで泣いている誰かの為に駆けつける真似もしない代わりに、今そこで泣いている誰かがいると知った時くらいはせめて、迷わぬようにと。

現実には甘くない。格好良いヒーローでないどころか単なる人としてさえ未熟な僕では足りない場合も多い。それどころか無視される事だつて珍しくない。でも、それはつまり僕が不足である一方で彼らが孤独に耐えているという事だ。明らかに誰かを頼つた方が簡単に解決出来るような問題であつたとしても、自分からそれを望もうとしない人は確かにいる。

だとすれば、僕にはそれを「弱い」とか「逃げ」だなんて言葉で否定するなんて出来るはずがない。そして同時に、もしも助けを求める人間がいたとしても、やはり彼らを「弱い」とか「逃げ」だなんて言葉で一括りにしてしまいたくもない。肩代わり出来る傷や痛みで自分に耐えられるものならば、背負って行きたいと；いや、生きたいと思うが、それを押つけて自分が「強い」とか「戦っている」なんて自惚れたいなんて微塵も思わない。そうして全てが終わつた後は、やはり一人で布団に入って眠れば良い。

僕は思うのだ。誰かを傷つけても我を貫く事が強さであるならば、自分は弱い人間で構わないと。傷つく痛み慣れる事が戦いの目的であるならば、自分は逃げる道を選ぼうと。その代わり、孤独を誰かのせいにしたらず、その上で優しい人間でいられば最高じゃないかと。

深夜0時のヒーロー論じゃ子供に憧れられる未来は期待出来ないかも知れないけれど。誰かを泣かせるくらいなら、いつそ自分が泣く方が良い。ただ、誰かに涙を見せられるほど自分は素直じゃなくて強くないから。そして僕は、泣きそうな夜は一人の部屋で布団を被るか、愛車のアクセルを膝から踏むような生き方をしようと決めたのだ。〈了〉